茶道のはじめ

大原　良通

前回、茶の字の始まりと陸羽の『茶経』について述べましたが、茶は唐代まで主にその薬効を期待して飲まれていたようです。しかし、この唐という時代を境に飲料の一つとして定着したと考えられます。そこで今回は、茶が飲料として、それも特別な飲料として広まっていった様子を見てみたいと思います。

一、『新唐書』と『旧唐書』

唐は豊かな社会、華やかな文化によって彩られ、アジアの先進国であり、あこがれの国でした。この時代を研究するために必要な史料が二つあります。『旧唐書』と『新唐書』です。これらは正史、正しい歴史と呼ばれ、いわば政府公認の歴史書です。中国の歴史書は紀伝体とよばれ、皇帝の事跡を中心に年ごとに記してある「紀」と、国に大きく関わった人物や外国のことをまとめた「伝」によって構成されています。普通は一つの時代に一つの正史なのですが、唐は旧

と新の二つがあるのです。もともと、九四五年に成立した趙瑩・劉昫編集の『唐書』があったのですが、いろいろ問題があるという事で、後に宋祁・欧陽脩等によってあらたに『唐書』が編集され一〇六〇年に完成しました。

その後、劉昫等の『唐書』は忘れられ、散逸してしまいます。それが、一六世紀になって修復され、清代になってその価値が再び認められます。こうして、劉昫編集の『唐書』は、欧陽修らの『唐書』に対して『旧唐書』と呼ばれる事になるのです。つまり、同じ王朝の事を記した歴史書が二つでき上がった訳ですが、同じ時代の事を書いているとはいえ、内容には異なる部分がいくつもみられます。有名なところでは、「日本」という国名が初めて中国の歴史書にでてくるのが『旧唐書』ですが、『旧唐書』には同時に「倭国」も存在します。しかし、『新唐書』には「日本国」の条しかなく、「倭国」の条はありません。このように、情報が整理されたり、内容が充実したりしています。

そのような違いの中で、注目したいのは『新唐書』は『旧唐書』に比べて茶に関わる人々の伝記が増えている事です。『旧唐書』には『茶経』を書いた陸羽の伝記が無く、『新唐書』にはあります。列伝に記される国や人物は、その王朝に大きな影響を与えた者が選ばれます。つまり、陸羽の伝記が『旧唐書』に無いという事は、『旧唐書』を編集した趙瑩や劉昫は、陸羽を

歴史上重要な人物だと考えていなかったのです。反対に『新唐書』を編集した宋祁や欧陽脩は、陸羽を政府公認の歴史書である『新唐書』に書き記して、後世に残さなければならないほど重要な人物だと判断したのです。もちろん、そこには編集者の個人的な嗜好も影響しているでしょうが、私はそれ以上に編集者が生きていた、その時代の特徴を反映しているのではないかと考えています。

『旧唐書』の編纂は、後晋の初代皇帝石敬瑭によって九四一年に始められます。しかし、石敬瑭は翌年に病没し、次の皇帝である出帝は文臣を重用しなかったようです。さらに、後晋という王朝自体、『旧唐書』の完成した翌年の九四六年に、二代、合わせて十一年の短命王朝として滅びてしまいます。このように、『旧唐書』が編纂された時代は、めまぐるしく王朝が代わり不安定な時代だったと考えられます。そのような時代には、ゆったりとお茶を飲むような余裕がなかったのではないかと思うのです。

一方、『新唐書』の編者が生きた時代は、安定した時代だったのです。宋は九六〇年に趙匡胤によって建てられ、文官を優遇して文治主義を唱えました。『新唐書』の編纂は、四代皇帝仁宗の一〇四五年に始められ、十五年の歳月と多くの人材を投入して一〇六〇年に完成します。国家の安定と繁栄は当然、その恩恵を最も強く受ける官吏たちの生活を豊かにします。生活に

余裕のできた彼らの中には、その余裕を絵画や文学などとともに、茶を楽しむことに費やす人間がでてきました。そして彼らは、陸羽が『茶経』のなかで、茶を飲むのにふさわしい人物としてあげている「精行倹徳之人」を目指しているのです。「精行倹徳之人」の意味を的確に説明する事は私の手には負えないのですが、大雑把に言って「行動が綿密で間違いが無く、ひかえめで頼りがいのある人」といった感じでしょうか。そしてそれはまさしく、宋の時代のインテリ層である士大夫と言われる人たちの理想の姿だったのでしょう。

「陸羽伝」は、「隠逸伝」の中にあります。「隠逸」とは、世の中から逃れ、汚れなく生きる人の事です。ここには陸羽のほかに、彼の友人である張志和や、顧渚山の麓に自ら茶園を持ち、その出来の善し悪しを楽しんでいた陸亀蒙や、茶に合う水の解説である張又新の書いた『水説』が紹介されています。『新唐書』の編者は茶をたしなむことが隠逸者の一つの特徴であり、世俗を離れ、茶を飲みながら汚れなく生きることが、理想的な生き方の一つだと感じていたのです。彼らは、どれも『旧唐書』には載せられていない人々であり、彼らに注目する余裕が『新唐書』の編集者たちの生きた時代を反映していると思うのです。

二、『封氏聞見記』と陸羽

封演という人物が、九世紀の初め頃に書いた『封氏聞見記』には、陸羽の逸話として次のようなものが採録されています。

楚の人である陸鴻漸（＝陸羽）が『茶論』をまとめて、茶の功能や煎茶や炙茶の方法、茶をいれるための道具二十四種類を「都統籠」にいれることを述べた。遠近を問わず、人々は陸羽を傾慕し、好事者の家は、この「都統籠」を備えた。常伯熊という人物がいて、また鴻漸の論にいろいろと書き加え、茶道がおおいに流行し、王公貴族はみな茶を飲むようになった。

御史大夫李季卿が江南を宣慰したとき、臨淮県の県館に着くと、「常伯熊が茶を善くする」と薦める者がいた。李公は茶事をおこなうように依頼した。伯熊は黄被衫を着て，烏紗帽をかぶり，茶器を手に執り、茶の名前に詳しくそれぞれを言いあてた。まわりのものは驚いた。茶が煮えると、李公は二杯すすってやめた。江南の外に出ると、また「鴻漸が茶を能くする」と薦める者がいた。李公はまた茶事をおこなうように依頼した。鴻漸は野服を着て、茶具に随って入り、席に着くと、説明することは伯熊の言ったことと同じであった。李公は心のなかでそれを軽蔑した。茶事が終わると、使用人に命じて銭三〇文を煎茶博士に支払った。鴻漸は江淮に遊び、上流階級にとけ込んでいた。それで、彼は羞ずかしく思い、

また『毀茶論』を書いた。伯熊は茶を飲み過ぎて、風を煩った。そこで晩年にはたくさん飲むことを人に勧めなかった。

○　茶道という言葉

この逸話からいろいろなことが読み取れると思います。まず、陸羽の書いた『茶経』によって好事家がみな「都統籠」を備えたとありますから、茶をいれるための共通の道具立てが成立したと考えてよいでしょう。さらに常伯熊という人物が、陸羽の『茶経』に手を加えることで、王侯貴族の間に「茶道」が流行したとあります。ここで「茶道」という言葉が初めて使われたとされています。しかし、「茶道」という言葉は、少し前に、皎然の「飲茶歌誚崔石使君」と言う詩の中にあり、楊春水は、『封氏聞見記』の内容とこの詩の内容を勘案して、「茶道」というのは茶を利用して「道」を悟ることだとします。また、舒玉傑は皎然のいう「全真茶道」というのは、茶会のやり方や花見や、月見や詩を吟じる事など、芸術を追求するという豊富な内容を含んだものだとしました。しかし、三七万五千以上の単語を載せている『漢語大詞典』にすら、「茶道」という言葉は拾われていません。つまり、この言葉は、定着せず使われなくなったようです。私たちが使用している「茶道」という言葉は、中国人の郁愚が「閒話茶道」で、「茶

道ということになれば、我われは隣国日本を連想する。茶道という言葉は、彼らが作り出したものだからである。」と言っているように、その語源を無理に『封氏聞見記』等に求めず、日本人の創作だと考えてよいようです。

○　常伯熊と陸羽

さて、話を『封氏聞見記』の内容に戻します。李季卿に呼び出された常伯熊は、正装して李季卿と対等の立場で茶を楽しみました。しかし陸羽は、質素な服で李季卿に茶を点て、彼の使用人から銭三〇文をもらいます。

常伯熊を李季卿に薦めた人物は、彼のことを「茶を善くする」といっています。「善」は「たくみである・習熟している」という意味です。陸羽を薦めた時は「茶を能くする」といっており、「能」は「うまくできる・才芸にすぐれている」という意味です。「能」より「善」のほうが知的な印象を受けます。また「茶器を手に執り」は、茶器を自らの手に持って入ってきたわけで、陸羽は「茶具に随って入」ってきたわけで、使用人か誰かが、茶具を運び込みそれに従って陸羽が部屋に入って来たと理解できます。ここには「器」と「具」、「執」と「随」という文字の使い分けが見て取れます。あくまでも私の個人的な印象ですが、「具」よりも「器」の方が、

上等な印象を受けます。また「執」には「あつかう・おそれしたがう」等の意味を含み、丁寧に扱っている感じを受けます。つまり、常伯熊は正装をして茶器を丁寧に携えており、それらのことから格式張って茶を入れている印象を受けるのです。一方、陸羽は自由な服装で、道具も人に運ばせていることから、茶を入れる手順ではなく、味を楽しむことに重点を置いているように思えるのです。

李季卿にとって陸羽による茶の説明は、常伯熊の二番煎じにすぎず、たいした格好もせず茶を入れる姿は、銭をはらって茶をいれさせる、つまりお金を払って食事を作らせる料理人と同じ存在に過ぎなかったのです。それは決して対等の立場ではなく、雇い主と使用人の関係です。茶は、世俗からはなれ「倹徳之人」が飲むのがふさわしいと言った陸羽にとって、服装で人間を評価され、入れた茶が金銭に置き換えられた事を恥ずかしく感じたのでしょう。さらにそのお礼も本人からではなく、使用人から支払われたのですから侮辱されたとすら感じたのかもしれません。同じ逸話が『新唐書』の「陸羽伝」にもありますが、「李卿礼を為さず（李卿は礼遇しなかった）」と端的にまとめています。このことがきっかけとなって、陸羽はとうとう『毀茶論』を書いたというのです。

三、おわりに

茶は、もともと薬として飲まれており、それは『封氏聞見記』に、

茶の早く採取したものを茶とし、晩く採取したものを茗という。本草には「のどの渇きを止め、眠れなくする。」といっている。

とあることからもうかがえます。茶の早く採取したものとは、春に採取したもので、晩く採取したものとは秋に採取したものと考えられます。この記事は陸羽の『茶経』（「一之源」・「七之事」）でも『爾雅』からの引用として見えます。本草というのはおそらく蘇敬が六五七年に皇帝に願い出て、六五九年に完成した『新修本草』のことだろうと思われ、「木部中品巻一三」に「茗」のことが記されており、その中に「渇きを去り、人の睡りを少なくする。」とあります。『新修本草』の項目の名前が「茶」ではなく「茗」となっている理由について、岩間眞知子氏は、本来は薬として飲用されていた関係で、カテキンを十分含む秋に採取されていたからではないか、としています。

その後、陸羽の『茶経』によってより多くの人に飲まれるようになり、単なる飲み物以上のなにか精神的な哲学的な飲み物へと発展します。陸羽の茶に対する考えは常伯熊の潤色によってさらに王侯貴族へと広まり、茶を飲むこと自体が士大夫つまりインテリの象徴的行為となっ

たのでしょう。常伯熊が陸羽の『茶経』にどのような書き足しをしたのかはわかりませんが、おそらく茶をいれる行為に何らかの格式張った、儀礼的な決まり事をもうけたのではないでしょうか。陸羽が『毀茶論』を書くにいたったのは、茶を飲むことの本質が忘れられ、形式や格式が尊ばれるようになったのを目の当たりにしたからだと考えられます。

『新唐書』を編纂した欧陽脩は、自ら『大明水記』という文章を書き、陸羽の『茶経』を引用しながら、張又新の書いた『煎茶水記（＝水説）』を批判するほど、茶に造詣の深い人物です。欧陽脩を中心とした『新唐書』の編集者たちは、茶を広めるのに大きな功績があった常伯熊の伝をたてませんでした。おそらく常伯熊は表面的に茶を広めただけであり、その本質は陸羽にあったと判断したのでしょう。

政府公認の歴史書である『新唐書』に、陸羽を初めとする茶に関わりのある人たちが記録されているのは、その歴史書を編纂した人々の時代背景を反映していると言えるでしょう。『旧唐書』が編纂された時代には、ゆったりと茶を楽しむ余裕などなく、彼らが注目されることはなかったのです。

茶は唐代に文化的飲み物として広がり、宋代では茶を飲むことが知識人のたしなみであり、象徴的行為となるほどに定着しました。そのインテリとしてのアイデンティティーやプライド

を表現するためにおこなう、茶を飲むという行為の原点を唐代の茶人たちに求めたのです。

(1)岩間眞知子、「唐代の医薬書」(『茶の医薬史』思文閣、二〇〇九年、三五～三六頁)。

(2)田中美佐、大原良通「『新唐書』にみえる陸羽史料の解説及び訳注」(『近畿大学短期大学部　短大論集』、第三九巻第一号、二〇〇六年一二月)。

(3)黄永年、「『旧唐書』的纂修」(『『旧唐書』与『新唐書』』人民出版社、一九八五年、二五頁)。

(4)黄永年、「『新唐書』的纂修」(『『旧唐書』与『新唐書』』人民出版社、一九八五年、三八～四〇頁)。

(5)『新唐書』巻一百九十六「列伝」第一百二十一「隠逸」、中華書局、一九七五年、五六一三頁。

(6)田中美佐、大原良通、「『封氏聞見記』及び『唐国史補』に見える陸羽史料の訳注と解説」(『近畿大学短期大学部　短大論集』、第四〇巻第一号、二〇〇七年一二月)。

(7)『旧唐書』巻一百五十四列伝第一百四、「孔巣父伝」四〇九五頁に、「廣德(七六三～七六四年)中，李季卿為江淮宣撫使，」とある。『新唐書』巻一百六十三　列伝第八十八「孔巣父伝」五〇〇七頁、に「廣德中，李季卿宣撫江淮，薦為左衛兵曹參軍。」とある。

(8)諸橋轍次、『大漢和辞典』、大修館、。桑田忠親編、『茶道辞典』、東京堂出版、一九八六年、三八二頁。

(9)楊春水編著、「茶道与禅悦」(『茶典』、内蒙古人民出版社、二〇〇四年、三二五～三二六頁。

⑩舒玉傑編著、『中国茶文化古今大観』、北京出版社、一九九六年、三五九～三六〇頁。

⑪羅竹風主編、『漢語大詞典』第九冊、漢語大詞典出版社、一九九二年、三八一～三八四頁。

⑫福本雅一、「茶道」（『中国茶話他』、藝文書院、二〇一二年、八一頁。）に引く、郁愚、「閒話茶道」（『茶事茶話』、世界文物出版社、一九七六年。）。

⑬布目潮渢、『茶経詳解』、淡交社、二〇〇一年、二三六頁。

⑭岩間眞知子、『茶の医薬史』（思文閣、二〇〇九年、三四～三六頁、三一二～三一七頁）。『新修本草』には、二カ所に茗の記事が見られる。『封氏聞見記』の原文は「止渇令人不眠」であるが、『新修本草』には、同じ記事は無い。特に「止渇」という記事は「木部中品巻一三」の「去炎熱渇」が近い記事となるが、ここではつづけて「令人少眠」とあり、「不眠」ではなく「少眠」となっている。「令人不眠」は「巻一八・菜部上品・苦菜」の注にある「疑此則是今茗、茗一名荼草。又令人不眠」にある。また、『茶経』でも「木部」からの引用は「令人少睡」となっており、「菜部」の引用では「令人不眠」なっているので「少」と「不」は「木部」と「菜部」で古くから使い分けられていたようだ。（布目潮渢、『茶経詳解』、淡交社、二〇〇一年、二八〇～二八三頁。）。

編集後記

校務の忙しさにかまけて編集が大幅に遅れたことをお詫びします。創刊号が出てから相当時間が立ちましたが、その間、あちらこちらから反応があり、置いていただいているお店からも売り切れや、追加の注文があり、思ったよりも良い滑り出しでした。創刊号を買って下さった方々にお礼申し上げます。

私の心づもりよりも三ヶ月遅れでなんとか二号をお届けできました。また、前号での予告通り、小説とマンガを掲載することもできました。マンガを投稿して下さった日吉さんは、十二月に大阪市福島区の聖天通りにある喫茶「ストーブ」http://kissastove.blog64.fc2.com/blog-entry-192.html で、個展を開かれます。是非足をお運びください。

茶味　第二号
編集　茶味の会
神戸市西区伊川谷町有瀬五一八
神戸学院大学人文学部大原研究室内・茶味の会
発行　銀聲舎出版會
和歌山県和歌山市和歌浦中二―十三―十五―一―二〇二
印刷　梅田印刷株式会社
東大阪市吉原二丁目四番八号